言行録にみる

舛添要一　都知事の素顔④

国民への目線や女性観は

舛添氏は、都知事就任の記者会見（２０１４年２月12日）の冒頭で「これからは多くの都民の方々に耳を傾けまして、私以外の候補に投票された方々も都民ですから、そういう方々のご意見も謙虚に聞きたいと思ってます」と述べました。

こうした姿勢は、非常に大切であり、ぜひ貫いてほしいと思います。

しかし、舛添氏のこれまでの発言にはこうした謙虚な姿勢は見られませんでした。

舛添氏ー「住民投票で日本の国策が左右されてはならない」

１９９６年８月、新潟県巻町（現新潟市）で、全国初の原発建設の是非を問う条例に基づく住民投票が実施されました。投票率は88％に達し、巻原発建設に賛成が46・３、反対が53・７％とそれぞれの意思を表明しました。

舛添氏――「『（原発）住民投票』は駄々っ子の甘え」

この住民投票に対して舛添氏は、雑誌『諸君』（１９９６年10月号）にタイトル「巻原発『住民投票』は駄々っ子の甘えである」、サブタイトル「住民投票を礼賛する世論が衆愚政治を生み、大衆民主主義をおぞましい独裁に変えるのだ」と文章を寄稿しました。

そのなかで舛添氏は、「「原発建設は国のエネルギー政策の一環であり、ある特定の地域の意向に左右されるべきものではない」「ある地域が国の政策に対して反乱を起こすときは、最終的にはその国から独立する覚悟がなくてはならない。国からの補助金は懐に入れる、しかし国の政策には反対するというのでは筋が通らないし、それは駄々っ子の甘え以外のなにものでもない」とのべました。

住民投票は衆愚政治への道が持論の舛添氏

また、自著「日本脳内開国」（２００２年４月「リヨン社」）では「住民投票で日本の国策が左右されてはならない」と述べ、さらに「舛添のどうする日本、どうなる日本」（２００１年６月「東京書籍」）でも、巻町の住民投票にふれ「住民投票は、下手をすれば衆愚政治への道を開きます」とのべているのです。

衆愚政治ーつまり住民投票は「自覚のない無知な民衆による政治」だというのです。

日本国憲法の改正には国民投票が必要ですが、舛添氏はこれも衆愚政治だと言うのでしょうか。

舛添氏――女性蔑視の発言の数々　都知事として都民の声聞いてください

国民を衆愚と言い放つ舛添氏は、女性蔑視の数々の発言もおこない、多くの人を驚かせています。

つぎの発言は、雑誌「ＢＩＧＭＡＮ」１９９９年10月号「増殖マドンナ議員は日本をダメにするか！？」（福島瑞穂氏ブログ、サンデー毎日３・２号参照）に掲載されたものです。

「僕は本質的に女性は政治に向かないと思う。たとえば、指揮者、作曲家には女はほとんどいない。女が作曲した曲に大したものがない。なぜか、と考えてみると、実は指揮者は政治家に似ていることに気づいたわけ。オーケストラを統率する能力は、女性は男性より欠けているわけです。作曲家が少ないのも、論理構成をして様々なパーツを上手にワンパッケージにまとめる能力がないから。これはシングル・イシュー・ポリティックス（単一争点政治）とも関係してくる。」「それから、体力の差ということでいえば、政治家は24時間、いつ重要な決断を下さなければいけないかわからない。そのとき、月１回とはいえ、たまたま生理じゃ困るわけです」「女は生理のときはノーマルじゃない。異常です。そんなときに国政の重要な決定、戦争をやるかどうかなんてことを判断されてはたまらない」などというものです。

冒頭に引用したように、都知事就任後の記者会見で、舛添氏は、都民の声を謙虚に聞く姿勢を打ち出しました。

ぜひこの立場を貫いてほしいとおもいます。

（連載終わり）